

中国人留学生を対象とした日本文化的社会的 スキル・トレーニングの効果性^{1, 2}

毛 新華 神戸学院大学心理学部 木村 昌紀 神戸女学院大学人間科学部

Effectiveness of Japanese cultural social skills training for Chinese international students.

Xinhua Mao (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Masanori Kimura (*School of Human Sciences, Kobe College*)

本研究の目的は、留学生に日本文化的スキルを身につけてもらう SST プログラムを作成すること、そして、プログラムの中国人留学生に対する即時的向上効果および持続効果を検証することである。先行研究を参考に、文化共通のスキルと日本文化的スキルのそれぞれをトレーニングできるプログラムを作成した。中国人留学生 22 名を実験群とし、作成されたプログラムを実施した。また、別に収集した中国人留学生 252 名の社会的スキル尺度のデータを用いて、比較群とした。実験群内における測定時期の比較、そして、実験群の各測定時期と比較群のそれとの比較という 2 種類の分析を行った結果、中国文化的スキル尺度の得点に変化が見られず、文化共通のスキルと日本文化的スキル尺度の一部に得点の向上がみられた。しかし、3 ヶ月後の持続効果はごく一部の尺度に限定されていた。これらの結果を踏まえ、本研究で作成したプログラムの有効性を確認できた。今後、中国人留学生への普及が期待される。

Key words: Japanese cultural social skills training, Chinese international students, effectiveness.

キーワード：日本文化的社会的スキル・トレーニング、中国人留学生、効果性

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2022, Vol.5, No.1, pp.39-52

問題と目的

日本政府が 2008 年に打ち出した「留学生 30 万人計画」は、2019 年度に 1 年前倒しで達成された（日本学生支援機構、2020）。その後、2020 年のコロナウィルス感染症の世界的流行の影響により、留学生数が全体的に減ったものの、2021 年 5 月現在、日本国内の外国人留学生は約 24 万人にのぼる。留学生の絶対数や日本が受け入れた留学生総数に対する割合は、中国人留学生が常に最上位を占めている。2019 年 5 月、その人数は 12 万 4 千人あまりで、留学生全体人

数の 39.9% を占め、また、最新のデータである 2021 年 5 月時点では、その人数は 11 万 4 千人あまりで、留学生全体人数の 47.1% を占めている（日本学生支援機構、2022）。つまり、コロナ禍の状況において、中国人留学生の絶対数は若干減ったものの、留学生総数に対する割合は逆に増えている。

日本と中国は、地理的近接性があるものの、日中両国の対人関係のスタイルやコミュニケーションの仕方の違いについては、これまでに多くの先行研究（天児、2003；毛・清水・木村、2021；吉村、2012）によって明らかにされている。多くの相違点のうち、特徴的なものとしては、中国人の自己主張と日本人の間接・婉曲表現であった。中国人の強い自己主張は日本人を戸惑わせる一方で、日本人の間接的、婉曲的な表現は中国人にとって「話の主旨がわかりにくい」ものとなっている。日中間のこうした相違点の存在

1 本研究は JSPS 科研費（課題番号 21K02991, 15K17260, 16K04276, 21830061）の助成を受けた。

2 本研究の一部は日本社会心理学会第 52, 53 回大会にて報告された。

は、中国人留学生が日本文化に適応する際に大きな障壁になりえる。また、毛 (2010, 2013) は中国人留学生の日本文化適応上の課題について、自由記述調査を実施した。その結果、中国人留学生は日本人の対人関係におけるさまざまな固有のルールや規則などをわかっておらず、自分自身がこれまでのやり方で日本人とやりとりをすると、相手との思わぬ摩擦が生じることがわかった。このような結果は田中 (2000) が指摘した「在日留学生における適応の最大の課題は対人関係の形成」であるという知見と合致している。田中 (2000) はさらに、社会的スキル・トレーニングのアプローチが対人関係に関する異文化適応の促進に応用できると提唱している。このような議論は、社会的スキル・トレーニングによる留学生の異文化適応促進に関する応用可能性を理論的に示唆している。

社会的スキルは、対人関係を円滑に運ぶ技術 (菊池, 1988) であり、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人行動、そして、そのような対人行動の発見を可能にする認知過程も含む (相川, 1996)。さらに重要な点として、社会的スキルは、「文化的特性」と「向上可能性」という二つの特徴がある。文化的特性は、その社会で必要とされるスキルの種類が文化によって異なることを指している (大坊, 2003)。一方、向上可能性については、スキルは練習・トレーニングにより向上可能なものであることを指している (Argyle, 1967)。本研究では、社会的スキルのこの二つの特徴を切り口として、日本人との円滑な対人関係の形成・展開に必要な日本文化の社会的スキルを、トレーニングを通して中国人留学生が身につける方法を検討する。

文化と社会的スキル

文化による社会的スキルの種類の異同について説明する場合、Etic-Emic (文化共通性-文化独自性) というアプローチ (Berry, 1989) がしばしば用いられる。このアプローチによると、社会的スキルには、どの文化にも必要とされる文化共通の要素 (基礎スキル) と、ある特定文化にしか必要とされない文化独自の要素 (文化スキル) が含まれている。基礎スキルは、いわゆる記号化・解釈や言語・非言語的といったコミュニケーションの基本要素である。一方、文化スキルは基礎スキルを組み合わせるその文化で推奨される行動の応用である。2種類のスキルの関係として、基礎スキルが文化スキルの土台であり、文化スキルが基礎スキルの活用形である (大坊, 2006)。

基礎スキルを捉える尺度として、「会話を始める」といった基本的なスキルを測定する KiSS-18 (Kikuchi's Social Skills Scale; 菊池, 1988) や非言語能力を測定する感情的コミュニケーション尺度

(Affective of Communication Test, 以下 ACT とする, Friedman, Prince, Riggio & DiMatteo, 1980) などが存在する。

一方、文化スキルとして、「個人主義-集団主義」のアプローチ (Triandis, 1995) に基づけば、北米では自分の意見をはっきり相手に伝える「アサーション」が、東アジアでは相手と調和された対人関係を追求する「和」が、それぞれ重要視されている。さらに、同じ東アジアに位置づけられる日本と中国は、それぞれで重要視されている社会的スキルの種類が異なる部分がある。Takai & Ota (1994) は言葉によらないコミュニケーションである「以心伝心」の特徴に基づき、日本人の社会的スキルを日本的対人コンピテンス尺度 (Japanese Interpersonal Communication Competence, 以下 JICS とする) として整理している。この尺度では、日本文化において重要とされる間接的メッセージを認知する「察知能力」、本当の感情を隠し、自己主張を抑える「自己抑制」、目上の人との適切な相互作用ならびに言語使用に関する「上下関係の調整」、繊細なメッセージの扱いに関する「対人感受性」、そして、曖昧な態度を必要とする相互作用スキルに関する「曖昧さに対する耐性のなさ」といった5つのスキルが測定されている。これに対して、Hwang (1987) は儒教の「関係主義」に基づいて相手のプライドを重要視する「面子」などの内容を中心とした理論的モデルを構築している。Mao & Daibo (2006) はこのモデルに基づき、中国人大学生社会的スキル尺度 (Chinese University-students Social Skills Inventory, 以下 ChUSI とする) を作成し、中国の若者の社会的スキルを整理した。具体的な内容としては、相手の面子を重んじる「相手の面子」、他者とすぐ仲良くなれる「社交性」、対人関係において積極的に他者を助ける「友達への奉仕」、対人関係においてできる限り自分のネットワークを拡張しようとする「功利主義」である。

本研究は、社会的スキルの文化共通性と文化独自性という二つの側面に焦点を当て、既存の尺度を用いて定量的に検討する。

社会的スキル・トレーニングのアプローチ

Argyle (1967) は、社会的スキルが運動スキルと同じように、最初はできなくても、練習次第でできるようになり、さらに熟達していくものと考えている。それゆえ、社会的スキルに対するトレーニング (Social Skills Training, 以下 SST とする) という発想が生まれる。

SST のアプローチとしては、モデリングやリハーサルを通して、新しい社会的スキルを身につけるもの (相川, 2009) が存在する一方で、Kolb (1984) の体験学習モデルをベースとする「体験から人間関係を学ぶ」ラボラトリー・メソッドによる体験学習 (Experiential Learning using the Laboratory Method, 以

下 ELLM とする) の実習を用いた方法もある (後藤・大坊, 2005, 2009; 津村, 2002)。ELLM の方法は、参加者があらかじめ設定された構造的なプログラムを体験した後、プロセスを振り返り、体験から学ぶアプローチとなっている。構造的なプログラムを実行する流れとして、①プログラムのねらいと流れを提示する、②グループで課題に取り組む、③課題に取り組んだプロセスをふりかえり用紙に記入する、④記入内容をグループでわかちあう、⑤体験や気づきを全体でわかちあう、⑥必要に応じて小講義を実施する、という6つのステップが設定されている(中村, 2013)。また、Benne, Bradford & Lippitt(1964) や Kolb (1984) や津村・星野(1996) は、トレーニングを通して、参加者が「学び方を学ぶ」ことができるため、自身の行動に対する自主的な修正が可能となり、トレーニングの場を離れても学んだことを活かし、トレーニングの効果が持続できると主張している。日本では、ELLM の実習を用いながら、他のコミュニケーションの要素を加えて使用する SST 実践(後藤・大坊, 2005, 2009; 大坊・栗林・中野, 2000; 津村, 2002) が多く、大学生や社会人の社会的スキルの向上効果および持続効果が確認されている。

文化的社会的スキルのトレーニング

ELLM による SST プログラムの有用性を踏まえつつ、毛・大坊(2012, 2016) はそれまでに行われた上記の研究において、「文化共通の要素」しか扱われていないことを指摘した上で、中国文化特有の社会的スキルに注目し、トレーニングの内容に「中国文化的要素」を導入し、中国人大学生を対象に中国文化的 SST を実施した。このうち、毛・大坊(2012) は、SST を文化共通編、文化特有編など、あわせて12の体験学習のプログラムで構成した。それぞれのセッションは ELLM の流れに対応しており、決められた課題に取り組んでもらい、体験について参加者での話し合いをしてもらった。その上で、体験内容と関連のある講義を受けさせ、自らの体験と講義内容を融合し、体験内容の日常生活における応用に関する記述をってもらうものであった。12回のプログラムを3週間にわたって実施した。このうち、文化共通編では、大坊他(2000) にならぬ、参加者が人とのコミュニケーションをとるために必要な言語的／非言語的スキル(視線・表情)、集団の中で人と関わるスキル(主張・同調)、そして自他共存のための考え方(価値観の共存)や行動(アサーション)など、社会生活における文化共通の社会的スキルをトレーニングの内容として設定した。一方、文化特有編では、中国文化特有の社会的スキルの「相手の面子」、「友達への奉仕」、「功利主義」因子(Mao & Daibo, 2006) をトレーニングの内容として取り入れた。中国人大学生を対象に、このプログラムを実施した結果、いかなるトレーニングのプログラムも経験しな

い統制群では有意な得点の変化がみられなかったのに対して、プログラムを経験した実験群では多くの文化共通のスキルと中国文化的スキルの向上が確認できている。また、その効果は3ヵ月後の追跡調査においても持続された。ELLM による SST が文化的社会的スキルに対しても効果があることを踏まえて、中国人留学生の日本文化的社会的スキルの促進に、このようなアプローチの活用が期待できる。

中国人留学生を対象とする日本文化的 SST

先述した日本人と中国人のコミュニケーションの仕方の違いや中国人留学生の日本文化への適応上の課題点を考慮した場合、中国人留学生にとって、間接的、婉曲的な表現を含む日本人の対人関係にあるさまざまな固有のルールや規則に対する認識・理解スキルや対人的な摩擦の解決スキルといったものが必要であろう。異文化環境という文脈において新しい社会的スキルを習得する SST を考えるに際して、異文化での体験学習モデルに基づくプログラムが役に立つとされている(吉田, 2009)。そのプログラムでは、「新しいルールを理解する」スキルや「文化的摩擦を理解する」スキル、さらに「新たなソーシャルサポートを獲得する、リラックスする」スキルの向上を目指している。中国人留学生が置かれた文脈を考えた場合、彼らにとって日本文化的スキルは重要なものとなる。そこで、本研究では、この吉田(2009) のプログラムを援用し、Takai & Ota (1994) の整理した「察知能力」や「自己抑制」をはじめとする日本人の社会的スキルを中国人留学生に「新しいルール」として身につけてもらうことを目指す。

本研究の目的

以上のことを踏まえて、本研究では、まず Etic-Emic アプローチをベースに、社会的スキルの内容を「文化共通」と「文化独自」に区別する。その上で、毛・大坊(2012, 2016) の中国人大学生を対象とした SST プログラムを基として、文化共通の部分はそのまま用い、中国文化的スキルの部分を日本文化的スキルのプログラムに差し替えて、中国人留学生の文化共通のスキルと日本文化的スキルを向上させる SST プログラムを作成する。さらに、作成されたプログラムを中国人留学生に実践し、その即時的向上効果および持続効果を検討する。本研究の仮説は以下の通りである。

仮説1 本研究の SST プログラムは、その内容によって、中国人留学生の文化共通および日本文化的スキルの向上効果をもつが、他方で、彼らの出自文化である中国文化に関係する社会的スキルの向上には効果をもたらさないであろう。

仮説2 体験学習は、参加者が「学び方を学ぶ」ことを促進し、「参加者が自身の行動に対する自主的な修正」を行うことを可能にするという特質を有す

るため、プログラムは中国人留学生の社会的スキルを即時的に向上させるだけでなく、SST 終了後においても持続効果を持つであろう。

方法

方法の概要

本研究では、中国人留学生に日本文化の社会的スキルを身につけさせるために、日本文化的スキルを反映した SST を実施した。それに先立ち、先行研究を踏まえて、SST プログラムを作成した。また、SST プログラムが参加者（以下、「実験群」とする）にもたらず即時的向上効果および持続効果を調べるために、SST の前後、および SST 終了後 3 ヶ月の時点において、自己報告の文化的社会的スキル尺度を用いて、参加者の社会的スキルのレベルを測定した。そして、実験群の実施と同じ時期に収集した実験群とは別の中国人留学生の社会的スキル尺度のデータを「比較群」とみなし分析を行った。

実験群に用いる文化共通のスキルを高めるプログラム

実施の効率性を考慮し、本研究では、中国人留学生を対象とした「文化共通のスキル」をトレーニングするプログラムに、毛・大坊（2016）のプログラムを採用した（Table 1 の第 1～3 セッションの「文化共通編」）。なお、このプログラムは毛・大坊（2012）にある 8 セッションのものの短縮版である。

短縮版では、参加者の「自己表現と他者理解のためのスキル（e.g. 自分の情報を開示する・他者の情報を読み取る）」、「人とのコミュニケーションをとるための言語的/非言語的なスキル（e.g. 言語・視線・表情などのコミュニケーションチャネルの使い方）」、「集団の中で人と関わるスキル（e.g. 問題解決の仕方）」など、どの社会においても基本的な社会的スキルをトレーニングのターゲットとしている（プログラムの詳細は毛・大坊（2016）を参照）。

日本文化的スキルをトレーニングするプログラム

本研究では、異文化環境下において新しい社会的スキルの習得に役に立つ吉田（2009）の SST プログラムを採用した。中国人留学生に日本文化的スキルを身につけさせる目的に照らし合わせて、吉田（2009）のプログラムの内容をより日中間の違いという文脈を意識して具体化させた。プログラムは、「日本文化と中国文化の間のコミュニケーションスタイルの違いを捉えるスキル（e.g. 日本のルールを発見する力、対処の仕方）」、「中国人留学生と日本人の間に発生する誤解・摩擦の原因を分析するスキル（e.g. 日本人の行動の裏にある考え方を理解する D.I.E. 法（Description= 事実描写, Interpretation= 解釈, Evaluation= 評価）の習得）」、「ソーシャルサポートの獲得やストレスの解消に関するスキル（e.g. 中国を離

れて日本人・日本社会からサポートを得る方法、リラクゼーションの方法）」を鍛える 3 つのセッションによって構成されている（Table 1 の第 4～6 セッションの「日本文化編」）。

第 4 セッションは、「国際会議のコーヒータイトム」と題する異文化環境下のルールを考えるモジュールによって構成されている。ここでは、日本人のコミュニケーションスタイルの特徴の発見、日本文化にまつわるルールの発見、これまでの自分のコミュニケーションの仕方と日本的コミュニケーションスタイルとの折り合いの付け方について理解させることが目的であった。具体的には、事前に参加者全員に互いに異なる会話ルールを伝えて（但し、本人たちは互いの会話ルールが異なることは知らされていない）、二人ペアを次から次へと組んでもらい、会話を展開させた。宿題として、参加者に「コミュニケーションと異文化コミュニケーション」という資料を読んでもらい、中国文化と日本文化の違いと日本文化環境下にある新しいコミュニケーションスタイルに気づいてもらい、そして調整する能力の必要性を理解してもらった。また、日本文化への適応に関わるコミュニケーションスタイル変換に関する理解もしてもらった。

第 5 セッションは、「D.I.E. 法」と題する異文化摩擦の解決法を身につけるモジュールによって構成されている。ここでは、中国文化と日本文化の対人特徴の違い、同じ行動が日中文化間で異なる解釈になる可能性を提示し、日本人との誤解を減らすことが目的であった。具体的には、D.I.E. 法に基づく異文化環境下での摩擦の分析例に習い、ある中国人留学生と日本学生との摩擦事案を分析させた。その延長として、普段各自が感じている日本人の対人関係に対する違和感を参加者間で共有させた。宿題として、参加者に「文化と文化間摩擦」という資料を読んでもらい、文化現象を絶対視する視点から脱却し、多角度から日本人の行動を解釈するスキルを身につけてもらった。文化普遍主義、文化相対主義、文化間における誤解発生メカニズムに関する理論を理解してもらった。

最後の第 6 セッションは、2 つのモジュールによって構成されている。一つは「代替選択」、もう一つは「リラクゼーションリスト」であった。「代替選択」では、新しいソーシャルサポートの獲得に向けて、参加者に、日本社会におけるソーシャルサポートへの理解とサポート資源の獲得方法について話し合わせた。このモジュールでは、参加者は、来日に伴い、失った自分をサポートするリソースをリストアップし、それに代替するリソースについて思考・記述した上で、参加者間で共有してもらった。二つ目のモジュールの「リラクゼーションリスト」では、ストレス緩和に向けて、参加者は自分自身に合う方法を考えた。参加者は、大学や住まいの周辺にあるリラクゼーショ

ン施設や自分自身が使ったリラクセス法をリストアップし、参加者間で共有してもらった。宿題として、参加者に「異文化への適応」という資料を読んでもらった。資料に以下の2つの内容が盛り込まれた。一つ目は、文化適応のプロセスに少しずつストレスが溜まっていき、心理的に混乱状態に陥るカルチャーショック (Oberg, 1960) に関する理論であった。もう一つは、異文化への適応過程を、滞在期間の推移に伴って、①「ハネムーン期」、②「憂鬱期」、③「回復期」、④「適応期」、という4つの段階によって構成されているU字カーブ理論 (Lysgaard, 1955) であった。この2つの理論の勉強を通して、異文化環境下で発生しうるストレスの仕組みへの理解力を身につけてもらって、そして、ストレスを乗り越えられる見通しが立つことに対して理解してもらった。なお、このセッションは社会的スキルをトレーニングするわけではなく、社会的スキルをうまく実行できるメンタル面に対するサポートとなっている。

本研究では、ELLMの構造的なプログラムにおける流れのうち、「課題への取り組み」、「ふりかえり用紙への記入」、そして、体験や気づきの「グループ内でのわかちあい」、さらに、「全体でのわかちあい」については、各セッションの時間内にて実施した。時間の配分としては、「課題への取り組み」は全体時間の3分の1を、「ふりかえり用紙への記入」と「グループ内および全体でのわかちあい」は3分の2を占めている。ただし、参加者の時間拘束の負担を考慮し、「小講義」の部分を講読資料として、当該のセッションの目的に合わせた内容がまとめられたプリントを参加者に配付し、持ち帰って精読してもらった。

実験群を対象とした SST の実施

参加者³ 関西のある国立大学の大学院および大学に在籍している中国人留学生22名（男性8名、女性14名；平均年齢26.37 ± 2.58；日本滞在期間は1.30 ± 0.83年）がSSTに参加した。

実施 セッションが開始するまでに、すべての参加者に、後述の社会的スキル尺度を用いて、社会的スキルのレベルを測定（以下、「PRE」とする）した。その後、前項で述べたSSTプログラムの6つのセッションを一週間間隔で合計6週間にわたり、大学の午後の授業終了後に実施した（1セッションあたり約1時間）。参加者のスケジュールに合わせて、

22名の参加者を2つの班に分けて、別々に実施した。トレーニングの実施は社会心理学を専攻し、多くのSSTのファシリテーターを経験した中国人男性が中国語で行った。文化共通の社会的スキルをトレーニングするセッションは、毛・大坊（2012, 2016）の実施マニュアルに従った。一方、日本文化的スキルのトレーニングは、ELLMの流れに照らし、吉田（2009）の提示した内容をベースに日本文化の特徴が反映されるようにアレンジして実施した。なお、参加者はすべてのセッションに参加し、一律の謝礼が支払われた。

SST実施後およびSST終了後3カ月の時点において、PRE測定に使用した尺度と同じ尺度で参加者の社会的スキルのレベルを測定（以下、それぞれを「POST」と「FOLLOW UP」とする）した。

社会的スキルの測度 本研究では、中国文化 (ChUSSI ①)、文化共通 (KiSS-18 ②とACT ③)、そして、日本文化 (JICS ④) の3種類の社会的スキル尺度を用いた。⁴

①中国人大学生社会的スキル尺度 (ChUSSI; Mao & Daibo, 2006) この尺度は、中国人の行動様式を理論的根拠として開発されたものである。「相手の面子 (Partner's Mianzi, 以下PMとする)」、「社交性 (Sociability, 以下SAとする)」、「友達への奉仕 (Altruistic Behavior, 以下ABとする)」、「功利主義 (Connection Orientation, 以下COとする)」の4つの因子が含まれ、すべての項目に、「1：全く当てはまらない」から「9：非常によく当てはまる」まで、9件法で回答を求めた。

②KiSS-18 (菊池, 1988) この尺度は、社会生活で一般に必要と考えられるスキルを測定する尺度である。すべての項目に、「1：できない」から「5：よくできている」まで、5件法で回答を求めた。毛・大坊 (2007) の中国人大学生を対象とする因子分析の結果にならない、本研究では、この尺度を1因子構造として用いた。

③感情的コミュニケーション尺度 (ACT; Friedman et al., 1980) この尺度は、非言語的な感情の表出性を測定するものである。すべての項目に、「1：全く当てはまらない」から「9：非常によく当てはまる」まで、9件法で回答を求めた。なお、ACTは上記のKiSS-18とともに、毛・大坊 (2007) の中国人大学生を対象とする研究では、文化共通のスキルとしての適用可能性が確認された。

④日本的対人コンピテンス尺度 (JICS; Takai & Ota,

3 実験群の参加者を募集した際に、自由参加であることを十分説明した。そして、実験開始までに、実験者と参加者の双方が以下の内容が記載された承諾書にサインし、参加者の利益を保証した。具体的な内容として、①実験者は参加者の回答内容を学術目的以外に使用しないこと、②氏名などの個人情報を実験で得られた複数データの照合にしか使わないこと、③参加者には実験への参加・脱退の自由が保証されること、であった。

4 社会的スキル尺度以外に、中国人学生の認識した日本人の人間関係尺度 (Mao, 2011)、滞在国の対人スキル獲得尺度 (植松, 2004)、異文化適応感尺度 (植松, 2004)、在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度 (周, 1993) に関するデータも収集した。ただし、これらの尺度内容は本研究の報告の主旨に合致しないため、本研究で触れなかった。

Table 1 中国人留学生を対象とした日本文化的 SST プログラム

順序	レベル	テーマ(モジュール・プログラム名)	解説ポイント	ねらい (期待する向上領域)	コンテンツ
1		<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 (自己紹介/第一印象) 自分の対人関係の認識 (対人関係地図) 講読資料 (セッション後) 社会的スキルとは 人間関係とフィードバック ジョハリの窓 	<ul style="list-style-type: none"> 話し手、聞き手としてのスキル 人間関係ネットの中で人と関わる/ 人に関わられる 社会的スキルが含むもの・特性 トレーニング可能性 自己開示 フィードバックの重要性 	<p>自己表現 (話す、聞かせる)、関係調整、他者理解、対人認知</p> <p>自分意識/対人認知</p> <p>社会的スキル概念の理解・参加意欲/モチベーションの向上</p>	<p>グループを2つの作業班に分け、お互いに知り合うようにすべてのメンバーと一対一で自己紹介をする。終了後、班ごとに自己紹介のプロセスでのコミュニケーションのポイントを話し合わせる。</p> <p>自分と周囲にいる人々との間がどのような関係で結びつけられているかを図形化する。その上で、色塗りを通して、関係に対する感情を表現する。</p> <p>社会的スキルの概念、人間関係の中のフィードバックの重要性、そしてジョハリの窓について資料を閲覧の形で理論から参加者に理解させる。</p>
2		<ul style="list-style-type: none"> 言葉/非言語によるコミュニケーション (一方通行/双方通行のコミュニケーション) 視線の役割 (不思議な会話) 表情の表出・解読 (ミラーゲーム) 講読資料 (セッション後) コミュニケーションのプロセスとその阻害要因 	<ul style="list-style-type: none"> 理想的なコミュニケーション形態 表情の再確認 コミュニケーションにおけるチャネル間の運動性 最も効果的なコミュニケーションのあり方に気づく 	<p>言語/非言語のそれぞれの役割</p> <p>コミュニケーションの仕方の再認識</p> <p>チャネルの役割</p> <p>記号化/解読</p> <p>非言語の表出・解読</p> <p>他者理解</p> <p>コミュニケーションの質を高めるためのチャネルの重要性に対する理解</p>	<p>ある図形を参加者の一人から他の全員に伝えさせる。一回目ではこの1人が他の成員とコミュニケーションができないように伝えてもらう。二回目に対話的な伝え方をさせる。二つの条件で起きたコミュニケーションの違いを話し合いを通して明らかにする。</p> <p>「不思議な会話」では、2人で一組にし、条件を設けて、相手と会話させる (e.g. 楽しいことを相手を見ないで話す)。</p> <p>「ミラーゲーム」では、2人一組にし、7つの感情 (悲しみ、怒りなど) を相手に表出し、相手はそれを模倣する、当てるなどをさせる。</p> <p>コミュニケーションとは何であるか、どのようなプロセスをたどっているか、コミュニケーションがうまくいかない場合の要因を理論的に参加者に理解してもらう。</p>
3		<ul style="list-style-type: none"> 問題解決 (「ブックマートX」に行こう！) 講読資料 (セッション後) チームワーク 組織の中の個人行動 	<ul style="list-style-type: none"> チームワークを作る 組織の中の人間行動 チームの特徴と働く原理の理解 組織と個人行動の関係に関する知識 	<p>コミュニケーションの仕方、主張・抑制、リーダーシップ、計画、競争、組織に対する認識</p> <p>協同作業におけるチーム・組織の中での要素と方法に対する理解</p>	<p>4人1作業班に分け、それぞれ断片的な情報に基づき、口頭で情報を出し合って、作業班で規定時間内に一つの地図を作成させる。また、グループ間で競い合わせる。</p> <p>組織内の問題解決のプロセスに含まれる対人コミュニケーションの要素を理論的レベルから理解してもらう。</p>

文化共通編

Table 1 中国人留学生を対象とした日本文化的 SST プログラム (つづき)

順序	レベル	テーマ(モジュール・プログラム名)	解説ポイント	ねらい (期待する向上領域)	コンテンツ
4		<ul style="list-style-type: none"> 異文化環境下のルールを考える (国際会議のコアセッション) 講読資料 (セッション後) コミュニケーションと異文化コミュニケーション 	<ul style="list-style-type: none"> 他文化の慣習を発見する 異文化コミュニケーション展開の様相 自文化と異文化の違いを気づく、そして調整する能力の必要性を理解する 	日本人のコミュニケーションスタイルの特徴の発見、日本文化にまつわるルールの発見、これまでに自分のコミュニケーションの仕方と日本のコミュニケーションスタイルとの折り返しの付け方	参加者全員に予めもともと互いに違う会話ルールを伝える。二人ペアを次から次へと組んでもらい、会話を展開させる。 異文化への適応に関わるコミュニケーションスタイル変換に関する理論的な理解をしてもらう。
5		<ul style="list-style-type: none"> 異文化摩擦の解決法を身につける (D, I.E. 法) 講読資料 (セッション後) 文化と文化間摩擦 	<ul style="list-style-type: none"> 異文化環境下で誤解発生のメカニズムの理解 異文化を持つ相手の行動を自分と相手の双方から理解する方略 文化普遍主義と自文化中心主義 中国文化と日本文化下の対人スキル 	日本人との誤解を減らす、中国文化和と日本文化の対人特徴の理解、同じ行動の異なる解釈 文化現象を絶対視する視点からの脱却、多角度から異文化相手の行動を解読する	D, I.E. 法に基づく異文化環境下での摩擦の分析例に習い、ある中国人留学生と日本学生との摩擦事案を分析する。その延長線上、普段各自感じている日本人の対人関係に対する違和感を参加者間で共有する。 文化普遍主義、文化相対主義、文化間における誤解発生のメカニズムに関する理論を理解してもらう。
6		<ul style="list-style-type: none"> 新しいソーシャルサポートの獲得 (代替選択) ストレス緩和 (リラクゼーションリスト) 講読資料 (セッション後) 異文化への適応へ 	<ul style="list-style-type: none"> 自分をサポートする資源の重要性を理解する 異国においてサポート資源の入手方法 異文化環境下のストレスと表れ リラクゼーションにつながる自己調整 カルチャレーションへの理解 (U字カーブ) カルチャレーションの乗りこえる方法 	日本社会におけるソーシャルサポート獲得方法 ストレス緩和、自己調整、リラクゼーション 異文化環境下で発生しうるストレスの仕組みへの理解力	来日に伴い、失った自分をサポートするリソースをリストアップし、それに代替するリソースについて考え、記述する。参加者間で共有する。 大学や住まいの周辺にあるリラクゼーション施設の共有、自分自身が使ったリラクゼーション法をリストアップし、参加者間で共有する U字カーブ、カルチャレーションの現れる症状に関する理論的な理解をしてもらう。

1994) この尺度は、日本人論の中で描かれた日本人の行動様式に基づいて開発され、日本文化的な対人関係の特徴を反映している。「察し能力 (Perceptive Ability, 以下 PA とする)」、「自己抑制 (Self-Restraint, 以下 SR とする)」、「上下関係の調整 (Hierarchical Relationship Management, 以下 HRM とする)」、「対人感受性 (Interpersonal Sensitivity, 以下 IS とする)」、「曖昧さに対する耐性のなさ (Tolerance for Ambiguity, 以下 TA とする)」という 5 つの因子によって構成され、すべての項目に、「1: 当てはまらない」から「5: よくあてはまる」まで、5 件法で回答を求めた。

比較群のデータ収集

参加者⁵ 本研究では、2 つのグループの在日中国人留学生を対象とした。いずれも関西の大学、専門学校および日本語学校に在籍している中国人留学生であった。グループ 1 の留学生は 153 名 (男性 84 名, 女性 69 名; 平均年齢 23.52 ± 3.31 ; 日本滞在期間は 2.13 ± 1.73 年) で、グループ 2 の留学生は 99 名 (男性 57 名, 女性 42 名; 平均年齢 23.18 ± 2.59 ; 日本滞在期間は 1.92 ± 0.22 年) であった。グループ 1 とグループ 2 の留学生の平均年齢と日本滞在期間のそれぞれについて対応のない *t* 検定を行った結果、いずれも有意差がみられなかった (順に, $t(250) = 0.87, n.s., d = 0.11$; $t(250) = 1.14, n.s., d = 0.15$)。両グループのサンプルの性質は同等と考えられる。

比較群のデータ 比較群のデータは実験群のデータと同じ時期に収集したものを使用した。このうち、グループ 1 のデータについては毛 (2010) で、グループ 2 のデータについては Mao (2011) で取り上げたものである。いずれも一時点のみのデータであった。

社会的スキルの測定 グループ 1 に実施した調査では、実験群の測定に用いた 4 つの尺度のうち、① ChUSSI と④ JICS を測定した。グループ 2 に実施した調査では、② KiSS-18 と④ JICS を測定した。なお、③ ACT はいずれのグループにおいても測定しなかった。

結果

本研究の分析方法

SST プログラムが社会的スキルにもたらす影響を明らかにするために、本研究では、まず、Blake & Heslin (1983) が言及した「1 群事前事後テストデザイン」を用いて、実験群のみを対象に測定時期による社会的スキル得点の変化を検討した。それとともに、実験群の測定時期ごとに得られた得点を用いて、比較群の値 (一時点のみ) と比較し、Blake & Heslin

(1983) が言及した「コントロール群事前事後テストデザイン」に近い形で実験群の得点の変化を検討した。

実験群の測定時期による社会的スキルの変化

SST 参加者のそれぞれの尺度における PRE と POST の得点変化および FOLLOW UP の持続効果を検討するために、測定時期を独立変数に、各尺度の得点を従属変数とした 1 要因 3 水準の参加者内の分散分析を行った。

その結果、中国文化のスキル尺度 ChUSSI の 4 因子のうち、SA の測定時期の効果が有意傾向 ($F(2, 36) = 2.91, p < .10$) であったものの、多重比較で有意ないし有意傾向の結果が得られなかった。ChUSSI の他の因子においては、有意な測定時期の効果がみられなかった。

文化共通のスキルを測定する尺度のうち、ACT においては、測定時期の効果がみられた ($F(2, 36) = 5.59, p < .01$) ため、多重比較を行ったところ、PRE の得点より、POST および FOLLOW UP の得点が有意に高かった。しかし、KiSS-18 においては、測定時期の効果がみられなかった。

さらに、日本文化的スキル尺度 JICS の 5 因子のうち、測定時期の効果について、HRM, TA の 2 つの因子は有意ではなかったのに対して、PA, SR と IS の 3 つの因子において有意ないし有意傾向 (順に, $F(2, 32) = 4.64$; $F(2, 36) = 3.06$; $F(2, 34) = 6.78, ps < .10 \sim .01$) であった。この 3 つの因子にそれぞれ多重比較を行ったところ、PA 因子では、PRE の得点より FOLLOW UP の得点が有意に高かった。SR 因子では、PRE の得点より POST の得点が有意に高かった。IS 因子では、PRE の得点より POST および FOLLOW UP の得点が有意に高かった (Table 2)。

実験群と比較群との比較

実験群と比較群との比較に先立ち、両群の留学生の等質性をチェックするために、平均年齢と日本滞在期間のそれぞれについて対応のない *t* 検定を行った。その結果、年齢においては、実験群 (26.37 ± 2.58 歳) は比較群 (23.39 ± 3.05 歳) より有意 ($t(272) = 4.44, p < .001, d = 0.98$) に高かった。一方、日本滞在期間においては、実験群 (1.30 ± 0.83 年) は比較群 (2.05 ± 1.36 年) より有意 ($t(272) = 2.55, p < .05, d = 0.57$) に短かった。この結果から、本研究では比較群より実験群の年齢が高く、日本での滞在期間が短いと言える。そのため、両群の比較に、この二つの変数を統制する必要があると考えられる。

変数を統制した分析には、長谷川 (2018) にならひ、実験群と比較群を独立変数に、平均年齢と日本滞在期間を共変量に、各尺度の得点を従属変数とした共分散分析を行った。従属変数に、実験群の測定時期ごとに得られた値と比較群の値 (一時点のみの

5 比較群の参加者に対して、質問紙のフェイス・シートにて、得られた回答は学術目的以外に使用しないこと、個人を特定しないこと、回答を自らの意思で自由にやめられることを伝えた。

Table 2 社会的スキル尺度の分散分析および多重比較の結果

尺度	PRE		POST		FOLLOW UP		測定時期の効果	η^2_p	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD			
中国文化	PM	7.15 (0.70)	7.23 (0.87)	7.08 (0.85)	$F(2,32) = 0.54, p = .590$.03	—		
ChUSSI	SA	5.91 (0.95)	6.11 (1.08)	5.77 (1.18)	$F(2,36) = 2.91, p = .067$.14	有意差および有意傾向なし		
	AB	6.32 (0.85)	6.67 (0.99)	6.41 (1.04)	$F(2,34) = 1.90, p = .165$.10	—		
	CO	6.00 (1.37)	6.28 (1.47)	6.07 (1.49)	$F(2,36) = 1.00, p = .377$.05	—		
文化共通	KiSS-18	3.68 (0.42)	3.79 (0.62)	3.71 (0.54)	$F(2,36) = 0.74, p = .486$.04	—		
	ACT	4.86 (0.84)	5.25 (0.94)	5.28 (0.84)	$F(2,36) = 5.59, p = .008$.24	PRE < POST, PRE < FOLLOW UP		
日本文化 JICS	PA	3.38 (0.51)	3.56 (0.57)	3.76 (0.50)	$F(2,32) = 4.64, p = .017$.22	PRE < FOLLOW UP		
	SR	3.45 (0.50)	3.82 (0.58)	3.68 (0.57)	$F(2,36) = 3.06, p = .059$.15	PRE < POST		
	HRM	3.82 (0.76)	4.02 (0.80)	4.12 (0.57)	$F(2,36) = 1.38, p = .265$.07	—		
	IS	2.96 (0.72)	3.46 (0.72)	3.44 (0.76)	$F(2,34) = 6.78, p = .003$.29	PRE < POST, PRE < FOLLOW UP		
	TA	3.32 (0.64)	3.26 (0.86)	3.04 (0.80)	$F(2,36) = 1.72, p = .194$.09	—		

値)を用いた。

まず、実験群のPREと比較群を独立変数とした結果は以下の通りである。中国文化のスキル尺度ChUSSIの4因子のうち、PM、SA、COの因子のいずれにおいても群の主効果が有意(順に、 $F(1, 162) = 7.41; F(1, 164) = 6.78; F(1, 170) = 5.67, ps < .01\sim.05$)であり、比較群より実験群の得点が高かった。ABでは、群の主効果が有意ではなかった($F(1, 167) = 0.51, n.s.$)。また、KiSS-18も、群の主効果が有意ではなかった($F(1, 117) = 1.01, n.s.$)。さらに、JICSの5因子のうち、HRMにおいては、群の主効果が有意傾向($F(1, 267) = 2.89, p < .10$)であり、比較群より実験群の得点が高かった一方で、PA、SR、IS、TAでは、群の主効果が有意ではなかった(順に、 $F(1, 268) = 0.21; F(1, 266) = 0.47; F(1, 268) = 0.09; F(1, 268) = 0.86, n.s.$)。

実験群のPREの得点を用いて比較群と比較した際、両群の平均年齢と日本滞在期間を統制してなお有意差ないし有意傾向があった場合は、実験群のトレーニングの前において、当該の尺度に実験群と比較群との間に「等質性」が確認できないことを意味する。そのため、これらの尺度はPOSTおよびFOLLOW UPでの比較に妥当ではないと考えられ、後続の分析に用いないこととした。

PREにおいて等質性が確認された尺度を中心に、実験群のPOSTと比較群を独立変数とした結果は以下の通りである。ChUSSIのABにおいては、群の主効果がみられなかった($F(1, 167) = 2.34, n.s.$)。また、KiSS-18においては、比較群より実験群の得点有意傾向的に高かった($F(1, 117) = 2.92, p < .10$)。そして、JICSのPAとTAにおいては、群の主効果がみられなかった(順に、 $F(1, 268) = 1.32; F(1, 268) = 0.71, n.s.$)。が、SR、IS因子においては、比較群より実験群の得点有意ないし有意傾向的に高かった(順に、 $F(1, 266) = 8.17; F(1, 268) = 3.43, ps < .01\sim.10$)。

さらに、実験群のFOLLOW UPと比較群を独立変数とした結果は以下の通りである。ChUSSIのAB、

そしてKiSS-18は、群の主効果がみられなかった(順に、 $F(1, 165) = 0.73; F(1, 114) = 0.84, n.s.$)。そして、JICSのPA、SR、ISのいずれにおいても、比較群より実験群の得点有意ないし有意傾向的に高かった(順に、 $F(1, 264) = 4.15; F(1, 263) = 4.69; F(1, 264) = 3.02, ps < .05\sim.10$)。TA因子では、比較群より実験群の得点有意に低かった($F(1, 265) = 6.66, p < .05$)。

考察

本研究の目的は、ELLMの方法に基づいて、日本文化的スキルを身につけさせるSSTプログラムを作成すること、そして、そのプログラムを中国人留学生に実施し、即時的向上効果およびその持続効果を検証することであった。先行研究を参考に、文化共通のスキルと日本文化的スキルのそれぞれをトレーニングするプログラムを作成した。また、SSTプログラムの効果を検証するために、本研究では、「実験群内における測定時期の比較(以下、「実験群内比較」とする)」と「実験群の各測定時期と比較群との比較(以下、「比較群との比較」とする)」という2種類の分析を行った。

実験群内比較から得られた主な結果

「実験群内比較」では、中国文化の社会的スキル尺度ChUSSIの4因子、文化共通のスキルを測定するKiSS-18について、測定時期による得点の有意な変化がなかった。これに対して、文化共通のスキル尺度である非言語的スキルを測定するACT、そして、日本文化に関係するスキル尺度JICSのSRとISにおいては、PREの得点よりも、POSTの得点有意に向上したが、JICSのPA、HRM、TAに得点の変化はなかった。また、ACTとISにおいては、POSTの得点の向上だけではなく、FOLLOW UPの得点がPREより高かった。加えて、PAにおいては、PREとPOSTの間に有意差がなかったものの、FOLLOW UPの得点がPREの得点より有意に向上した。

Table3 比較群と実験群の各測定時期の調整平均値と標準誤差

尺度	比較群			データの時期	実験群			検定結果	
	M	SE	N		M	SE	N		
中国文化 ChUSSI	PM	6.213	(0.080)	144	PRE	6.867	(0.221)	22	$p = .007, \eta^2_p = .044$
	SA	5.208	(0.090)	146	PRE	5.915	(0.250)	22	$p = .010, \eta^2_p = .040$
	AB	5.987	(0.097)	150	PRE	6.202	(0.278)	21	$p = .474, \eta^2_p = .003$
		5.991	(0.097)	150	POST	6.448	(0.277)	21	$p = .128, \eta^2_p = .014$
		5.984	(0.098)	150	FOLLOW UP	6.255	(0.295)	19	$p = .393, \eta^2_p = .004$
	CO	5.372	(0.120)	152	PRE	6.246	(0.339)	22	$p = .018, \eta^2_p = .032$
文化共通	KiSS-18	3.420	(0.062)	99	PRE	3.634	(0.181)	22	$p = .317, \eta^2_p = .009$
		3.402	(0.064)	99	POST	3.780	(0.188)	21	$p = .090, \eta^2_p = .024$
		3.413	(0.067)	99	FOLLOW UP	3.662	(0.234)	19	$p = .361, \eta^2_p = .007$
日本文化 JICS	PA	3.343	(0.041)	250	PRE	3.415	(0.148)	22	$p = .646, \eta^2_p = .001$
		3.345	(0.041)	250	POST	3.524	(0.148)	22	$p = .251, \eta^2_p = .005$
		3.343	(0.041)	250	FOLLOW UP	3.685	(0.162)	18	$p = .043, \eta^2_p = .015$
	SR	3.282	(0.039)	248	PRE	3.382	(0.141)	22	$p = .496, \eta^2_p = .002$
		3.282	(0.040)	248	POST	3.712	(0.143)	22	$p = .005, \eta^2_p = .030$
		3.281	(0.039)	248	FOLLOW UP	3.625	(0.152)	19	$p = .031, \eta^2_p = .018$
	HRM	3.542	(0.046)	249	PRE	3.838	(0.166)	22	$p = .091, \eta^2_p = .011$
	IS	3.030	(0.051)	250	PRE	2.973	(0.186)	22	$p = .769, \eta^2_p = .000$
		3.031	(0.052)	250	POST	3.394	(0.187)	22	$p = .065, \eta^2_p = .013$
		3.031	(0.051)	250	FOLLOW UP	3.403	(0.206)	18	$p = .083, \eta^2_p = .011$
	TA	3.386	(0.045)	250	PRE	3.229	(0.162)	22	$p = .355, \eta^2_p = .003$
		3.386	(0.046)	250	POST	3.239	(0.166)	22	$p = .401, \eta^2_p = .003$
	3.385	(0.045)	250	FOLLOW UP	2.911	(0.176)	19	$p = .010, \eta^2_p = .025$	

比較群との比較から得られた主な結果

参加者の平均年齢と日本滞在期間を統制した上で、「比較群との比較」を行った。その結果、中国文化のスキル尺度 ChUSSI の 4 因子のうち、比較に適している AB において、POST の得点は比較群との間に有意差がなかった。一方、文化共通のスキル尺度 KiSS-18、そして、日本文化に関係するスキル尺度 JICS の SR と IS においては POST の得点が比較群より有意に高かった。また、SR と IS において、FOLLOW UP の得点も比較群より有意に高かった。加えて、PA と TA は、POST の得点が比較群との間に有意差がなかったが、FOLLOW UP の得点は比較群より有意に高かった (PA) ないし低かった (TA、得点が低いと曖昧性に耐えられることを意味する)。

本研究の SST プログラムのトレーニング効果について

上記の 2 種類の分析結果をまとめる。中国文化のスキル尺度 ChUSSI の 4 因子はどちらの結果からもスキルの得点に変化が見られなかった。文化共通のスキルについては、「実験群内比較」には ACT で、「比較群との比較」には KiSS-18 で、得点の向上が見られた。また、日本文化に関係するスキル尺度 JICS は

どちらの分析の結果からも SR と IS に得点の向上が見られた。これらの結果から、本研究の仮説 1 はおおむね支持された。

本研究では、毛・大坊 (2012, 2016) の文化共通のスキルに対して即時的向上効果および持続効果のあるプログラムを採用した。そのプログラムは自己表現や他者とコミュニケーションを取るためのスキルをトレーニングしているため、本研究においても文化共通のスキル (ACT と KiSS-18) に対する効果が再現されたと考えられる。また、本研究の日本文化的スキルのトレーニングプログラムで、中国人留学生に日本的な対人スキルの特徴 (言葉によらないコミュニケーションなど) が中国文化的スキルと異なることを強く意識させたり、日本人との対人関係にトラブルが発生した時に客観的に分析できる方法 (D.I.E. 法) を教えたりした。これらの内容により、SST の参加者は日本文化の特徴である個人の主張を抑えること、および間接的・婉曲的なメッセージのやりとりを意識するようになり、SR と IS のような日本文化的スキルが向上したと考えられる。

一方、日本文化的スキルの PA と TA には、トレーニング直後の POST 得点に即時的向上は見られなかった。しかし、「実験群内比較」では、PA の

FOLLOW UP の得点が PRE の得点より有意に向上したほか、「比較群との比較」では、PA と TA はともに FOLLOW UP の得点が比較群より有意に変化した。すなわち、この二つのスキルは、SST の直後ではなく、時間の経過とともに、効果が現れると言える。このような結果になった理由としては、二つの可能性が考えられる。一つ目は、この二つの因子の内容の難易度である。2 因子はそれぞれ「間接的メッセージを認知するスキル」と「曖昧な態度を必要とする相互作用のスキル」であった。「間接的」、「曖昧」といったコミュニケーションの仕方はやや高度なものであるため、留学生にとって、習得するまでに時間がかかった可能性があるとして推測される。二つ目は、中国人留学生が「日本にいる」という状況に置かれていることである。今回の参加者は、プログラムの中で習ったことをその後の日本人との関わりのなかで、その都度思い返し、徐々に必要性に気づき、実践したと推測される。なお、JICS の HRM については、実験群の PRE での得点は 5 点満点中、3.82 という高い値となり、トレーニング前に得点の天井効果が発生していた可能性がある。このため、トレーニングの効果がみられなかったと考えられる。

毛・大坊 (2012, 2016) では、社会的スキルの文化共通の要素と中国文化の要素の両方をプログラムに取り入れて SST を行った。その結果、中国人大学生の文化共通のスキルと中国文化的スキルのレベルは向上したが、日本文化のスキルの向上はなかった。本研究のプログラムでは、毛・大坊 (2012, 2016) の文化共通の要素を引き継いだ上で、そのプログラムにある中国文化の要素を、日本文化の要素に置き換えて、中国人留学生に実施した。その結果、中国文化的スキルに変化がなく、文化共通のスキルと日本文化のスキルのレベルが向上した。プログラムの文化的要素の入れ替えにより、対象者が同じ中国人であっても、向上した文化的スキルが異なっている。この一連の結果を考えると、文化的スキルの向上効果は文化的スキルトレーニングプログラムに由来すると推察される。合わせて、「文化共通」と「文化独自」という社会的スキルの分け方の妥当性を裏付けているといえよう。

本研究のプログラムの持続効果について

「実験群内比較」において、ACT, SR および IS は PRE より POST の得点が向上した。このうち、ACT と IS では、FOLLOW UP の得点が PRE より高く、トレーニングの持続効果が見られた。また、「比較群との比較」において、KiSS-18, SR および IS は、POST の得点が比較群より有意に高かった。このうち、SR と IS の FOLLOW UP の得点は比較群より有意に高く、持続効果が見られた。「実験群内比較」の SR と、「比較群との比較」の KiSS-18 は、持続効果が見られなかった。SR については、実験群の中において持続効

果が確認できなかった一方で、比較群との比較では、持続効果が確認できた。このことから、SR は実験群内で 3 ヶ月後の得点が下がったものの、比較群と比べて依然として高い水準にあると推測される。すなわち、SR には持続効果がある可能性も考えられる。一方、文化共通のスキルとしての KiSS-18 の得点が持続効果を持たない理由については、今後の検討課題とする。

このように、分析の種類によって、IS 以外に、尺度によって持続効果にバラツキがあった。この結果を踏まえて、本研究の SST プログラムは、参加者の文化共通および日本文化的スキルに対して、SST 直後に即時的向上効果をもたらすが、SST 終了後 3 ヶ月後において、持続効果は一部の尺度にとどまっていると言わざるを得ず、仮説 2 は一部のみ支持された。

ELLM の持続効果について、津村・星野 (1996) による理論上の議論に続き、毛・大坊 (2012) では、中国人大学生を対象にした中国文化を考慮した社会的スキルトレーニングプログラムの効果検証においてこれを確認した。本研究では、中国人留学生の日本文化的スキルを習得する文脈において、この効果を部分的に検証することができた。Blake & Heslin (1983) は、持続性をもたらすプログラムが参加者の異文化の社会での活動をより有益なものにすると強調している。本研究のこの文脈における検討は、意義があると考えられる。ただし、部分的にしか検証できなかった理由については、SST の時間にあると考えられる。毛・大坊 (2012) では、1 セッション 2 時間をかけて行って、その中では、「ふりかえり」や「わかちあい」に十分な時間を確保しただけではなく、理論に対する理解を深めることに役に立つ小講義もセッション内で実行された。このような手続きによって、毛・大坊 (2012) では、トレーニング即時的向上効果および持続効果が十分に確認できた。しかし、本研究では、参加者の負担を軽減するために、1 セッション 1 時間で、小講義は資料配付と各自精読という形となった。このような影響により、本研究のトレーニング効果が不十分になった可能性が推測される。

本研究のサンプルの特徴および初期値の比較

本研究の実験群と比較群の基本属性を分析した結果、実験群は比較群より平均年齢が高い一方、日本滞在期間が短かった。すなわち、比較群より実験群は年上で、学歴が高く、中国での生活時間がより長く、中国人との対人的経験がより豊富であると推測できる。このように考えると、平均年齢と日本滞在期間の両変数を統制しても、実験群の PRE と比較群の得点の比較において、AB を除き、中国文化のスキル尺度 ChUSSI の 3 因子で、実験群の得点が高かったことは妥当な結果と言える。

その一方で、本研究の実験群と比較群の間には、日本滞在期間に違いがあるものの、相対的に長い方の比較群でも、その平均期間は 2.05 年であった。日本での経験年数は長いとは言えず、そのため、日本文化の社会的スキルがあまり身につけていない状態であると推測される。このように考えると、JICS の 5 つの因子のうち、4 つにおいて実験群の PRE 得点と比較群との間に有意な得点差がないことは妥当な結果と言える。なお、唯一両群の間に有意差のある HRM 因子については、毛・大坊 (2012) では、この因子の内容は ChUSI の PM 因子とよく似ていて、高い正の相関関係があると指摘している。両群の比較で、実験群の PRE の方が比較群に比べて PM 因子の得点が有意に高ければ、HRM 因子にも同様の有意差があることは当然の結果だと考えられる。このことは、前節で述べた実験群の HRM 得点に天井効果が生じた理由の一つであると推測される。

本研究の意義

社会のグローバル化が進み、日本社会はより多くの異文化出身者を受け入れなければならない時代に突入している。いかに異文化出身者をうまく日本社会に適応させるかが喫緊の課題といっても過言ではない。そのような中、本研究では、切迫した、具体的かつ現実的な適応の問題を抱えている中国人留学生を取り上げて、日本文化的スキルを向上させるプログラムを作成し、トレーニングの実践を行い、効果を確かめた。このような実践を、留学生の人数規模において最も大きい中国人留学生というグループに普及させれば、彼らの日本人とのコミュニケーションがもっと円滑になり、勉学という留学の本来の目的に集中しやすくなるだろう。

本研究の限界と展望

最後に、本研究の限界と展望を挙げておく。まず、本研究は、完全な実験計画法に則った実験デザインに改善する必要がある。本研究の分析に、「1 群事前事後テストデザイン」を用いて「実験群内比較」とともに、「コントロール群事前事後テストデザイン」を目指して、一時点のみのデータを「比較群」と見なして、実験群の各測定時期の値と比較した。しかし、実験計画法の観点から見た場合、本研究の比較群の設定は脆弱だと言わざるを得ない。そのため、実験群の効果はプログラムによるものなのか、それとも参加者の自然成長なのかについて、断定的に結論づけることができなかった。今後、完全な比較群、つまり、実験計画法に則って、実験群の測定方法と揃えた「統制群」の測定値を収集した上でプログラムを検証する必要がある。

また、本研究では、日本文化に特化している SST プログラムを中国人留学生に実行し、その効果を検証した。得られた効果をもとに、日本にいる他の文

化出身者に適用する可能性も考えられる。しかし、日中間では、コミュニケーションスタイルの違いがあるものの、両国は文化的な共通性を多く有している。そのため、今回のプログラムを中国以外の出身者に適用した場合、本研究と同じ効果を持つとは限らない。今後、本研究で考案したプログラムの他文化出身者への適用には、それぞれの国に応じた特有の社会的スキルを反映・調整させる必要があると考えられる。

最後に、本研究で用いた測定方法について、検討する余地がある。本研究では、実験群の PRE、POST、FOLLOW UP の 3 つの値も、比較群の値も、参加者から社会的スキルの自己報告尺度の得点を基準に SST の効果を検討した。しかし、異文化適応の SST の最も重要な目的は参加者の行動に変化をもたらすことである。本研究の方法では、参加者の意識レベルの変化は検証できたが、実際の行動に対する客観的な検証ができていない可能性がある。したがって、今後の研究において、参加者の行動に焦点を当て、参加者の周りにいる日本人からの評価データも収集し、SST による変化を検討すべきである。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 相川 充 (1996). 社会的スキルという概念 相川 充・津村 俊充 (編) 社会的スキルと対人関係——自己表現を援助する—— 誠信書房
- 相川 充 (2009). 新版 人づきあいの技術——ソーシャルスキルの心理学—— サイエンス社
- 天見 慧 (2003). 中国とどう付き合うか 日本放送出版協会
- Argyle, M. (1967). *The psychology of interpersonal behavior*. Harmondsworth, England: Penguin Books.
- Benne, K. D., Bradford, L. P., & Lippitt, R. (1964). The laboratory method. In Bradford, L. P., Gibb, J. R., & Benne, K. D. (Eds.), *T-Group theory and laboratory method: Innovation in re-education* (pp. 15-44). New York: John Wiley & Sons.
- Berry, J. W. (1989). Imposed etics-emics-derived etics: The operationalization of a compelling idea. *International Journal of Psychology*, 24, 721-735.
- Blake, B. F., & Heslin, R. (1983). Evaluating cross-cultural training. In Landis, D., & Brislin, R. W. (Eds.), *Handbook of Intercultural Training Volume I : Issues in Theory and Design* (pp. 203-223). New York: Pergamon.

- 大坊 郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニングの方法序説——適応的な対人関係の構築—— 対人社会心理学研究, 3, 1-8.
- 大坊 郁夫 (2006). 社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き 電子情報通信学会技術研究報告, 106, 31-36.
- 大坊 郁夫・栗林 克匡・中野 星 (2000). 社会的スキル実習の試み 北海道心理学研究, 23, 22.
- Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The Affective Communication Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.
- 後藤 学・大坊 郁夫 (2005). 短期間における社会的スキル・トレーニングの実践的研究 対人社会心理学研究, 5, 93-99.
- 後藤 学・大坊 郁夫 (2009). 短期的な社会的スキル・トレーニングの実践——社会人への適用を目指して—— 応用心理学研究, 34, 193-200.
- 長谷川 孝治 (2018). ボイストレーニング・プログラムへの参加経験が心理的健康と夫婦間コミュニケーションに及ぼす影響——高齢男性と配偶者の well-being を促進するか—— 実験社会心理学研究, 58, 15-28.
- Hwang, K. (1987). Face and favor: The Chinese power game. *American Journal of Sociology*, 92, 944-974.
- 菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル—— 川島書店
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential learning : Experience as the source of learning and development*. NJ : Prentice Hall.
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Sciences Bulletin*, 7, 45-51.
- 毛 新華 (2010). 在日中国人留学生の抱える文化適応の問題——自由記述調査のデータより—— 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 682-683.
- Mao, X. (2011). Why are Chinese students in Japan distressed in their interpersonal relationships with Japanese? *Poster presented at the 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology* (Texas, USA).
- 毛 新華 (2013). 日本人から見た在日中国人留学生の文化適応の問題点——日本人を対象とする自由記述調査のデータより—— 日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 196.
- Mao, X., & Daibo, I. (2006). The development of Chinese university-students social skill inventory. *Chinese Mental Health Journal*, 20, 679-683.(in Chinese)
- 毛 新華・大坊 郁夫 (2007). KiSS-18 の中国人大学生への適用 対人社会心理学研究, 7, 55-60.
- 毛 新華・大坊 郁夫 (2012). 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討 パーソナリティ研究, 21, 23-39.
- 毛 新華・大坊 郁夫 (2016). 中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果——中国人大学生の自己評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討—— 社会心理学研究, 32, 22-40.
- 毛 新華・清水 寛之・木村 昌紀 (2021). 中国の在留邦人における文化適応課題の検討——日中文化の相違点の認識に関する調査から—— 神戸学院大学心理学研究, 4, 31-40.
- 中村 和彦 (2013). 大学 1 年春学期におけるラボラトリー方式の体験学習の効果——体験から学ぶ力の影響—— 実験社会心理学研究, 52, 137-151.
- 日本学生支援機構 (2020). 2019 (令和元) 年度外国人留学生在籍状況調査結果 日本学生支援機構 Retrieved from <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2019.html> (2022 年 6 月 22 日)
- 日本学生支援機構 (2022). 2021 (令和 3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果 日本学生支援機構 Retrieved from <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2021.html> (2022 年 6 月 22 日)
- Oberg, K. (1960). Culture shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- 周 玉慧 (1993). 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み 社会心理学研究, 8, 235-245.
- Takai, J. & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence 実験社会心理学研究, 33, 224-236.
- 田中 共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism & collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
- 津村 俊充 (2002). ラボラトリー・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果——社会的スキル測定尺度 KiSS-18 を手がかりとして—— アカデミア (人文・社会科学編), 291-320.
- 津村 俊充・星野 欣生 (1996). *Creative human relations (I~VIII)* プレスタタイム
- 植松 晃子 (2004). 日本人留学生の異文化適応の様相——滞在国の対人スキル, 民族意識, セルフコントロールに着目して—— 発達心理学研究, 15, 313-323.
- 吉田 友子 (2009). 異文化との出会い——カルチャーショックと異文化適応—— 八代 京子・町 恵理

子・小池 浩子・吉田 友子 (編) 異文化トレーニング [改訂版]——ボーダレス社会を生きる——
三修社

吉村 章 (2012). 中国人との実践交渉術 総合法令
出版

—2022.8.31 受稿 2022.11.21 受理—